

当報告の内容は、報告者の著作物です。
Copyrighted materials of the authors.

AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2017年度第2回研究会（通算第5回目）

日時：2017年12月2日（土）14:00-19:00, 2017年12月3日（日）9:30-13:00

場所：東京外国語大学本郷サテライト4階

主催：AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」

共催：文科省科学研究費（基盤研究B海外）「アフリカ半乾燥地における農牧共生に基づく持続的農村開発に関する実践的研究」（代表者：鶴田 格）

出席者：鶴田 格、石川博樹、深澤秀夫、安溪貴子、小松かおり、坂梨健太、佐藤千鶴子、佐藤靖明、杉山祐子、杉村和彦、池上甲一、田中利和、松田正彦、藤本 武、藤岡悠一郎、坂井真紀子、足達太郎、石本雄大、泉 直亮

発表1：藤岡悠一郎（九州大学）

「アフリカ農牧複合論の再検討：ナミビア農牧社会の視点から」

アフリカの農牧複合に関する先行研究では、東アフリカ農牧社会を対象にした研究を基盤に、農と牧の有機的結びつきが希薄であることが強調されてきた。本発表では、南部アフリカに位置するナミビア北中部のオバンボ農牧社会の事例を基に、農と牧の結びつきについて検討した。同地域では、厩肥の畑への散布や牛耕、刈跡放牧、畑内での家畜囲いの移動など、生産面における農と牧の比較的強い有機的結合が見受けられた。また、干ばつや洪水などの気象災害発生時には、作物と畜産物を物々交換する食料獲得のチャンネルがあることを紹介し、生産面における有機的結合という視点ではとらえきれない、消費の側面における農と牧の相互補完的な関係について報告した。さらに、アフリカの他地域における農牧社会の事例を整理し、ナミビア農牧社会でみられた特徴が同地域固有のものではなく、他の地域においても見受けられることを確認した。これらの情報を基に、アフリカ農牧複合論について再検討を行い、これまでに支配的であった、半農半牧と有畜農業という農牧の二類型論に対し、“アフリカ型農牧複合”という形態を加えた三類型で捉える枠組みを提案するとともに、農牧複合を捉える軸として、“農と牧の相互補完性”という視点の重要性を指摘した。

発表2：石本雄大（青森公立大学）

「西アフリカ、サヘル地域農牧民の生業活動とその変容 —ブルキナファソ北東部の事例—」

本発表では、西アフリカにおける農牧複合の特徴を概観し、そこにブルキナファソ北東部の研究事例がいかに関与位置づけられるかについて論じた。まず、農牧複合の代表的要素である、地力管理としての厩肥利用、飼料確保としての作物残渣利用、効率化のための畜力利用などの研究事例を紹介し、加えてヨーロッパ型農牧複合システムである **Mixed farming** において想定される農牧複合の特徴（人口増加による推進、単一経営体、集約化の進行）との共通点および相違点を議論した。西アフリカでは単一集団内のみならず他集団間での相互補完的な農牧複合も一般的であることや、人口増加以外の自然、社会、経済、政治といった多様な要因により推進された事例を紹介した。発表の後半には、ブルキナファソ北東部の農牧民ケル・タマシエクの事例を紹介し、農牧以外の活動も含めた家畜群の再生産および消費プロセスにおける再分配をも内包する生業システムや、その変容に関する研究成果を報告した。この生業システムの変容は、自然災害による牧畜の衰退、それに伴う移動性低下が招いた採集の不活発化、また代替的収入源として導入した出稼ぎ活動による現金稼得の恒常化の総体として起こったものであった。

発表3：泉 直亮（兵庫県立大学）

「農牧民スクマの『大富豪』世帯を維持・形成する社会的なしぐみ」

東アフリカ・タンザニアの農牧民スクマ社会は、近年、「企業家的」な生産を拡大している。すなわち、従来の世帯を核としたウシ牧畜とウシを利用した農耕という農牧複合に従事しつつも、周囲の小農を多く雇用して市場で大きな利益を得る大規模な生産を展開している。本発表では、とくに大規模で企業家的な生産をおこなうスクマの「大富豪」世帯が、いかに形成、維持されるのかといった社会的なしぐみをあきらかにした。第一にスクマ社会の親族内では、世帯間で大きな富（多くのウシ）を持つ世帯に多くの人材が集まり「大富豪」世帯が形成されやすいこと、そして、その背景には「大富豪」を志向する世帯と志向しない世帯の相互補完的な関係があることが示された。第二に、「大富豪」世帯では、世帯主とその既婚の息子との交渉によって大規模な世帯が維持されていることがあきらかになった。父親と息子は、互いの交渉によって父親から息子へと他の富が委譲されるなか、社会的にもっとも重要な財であるウシを最後の紐帯とすることで「大富豪」世帯は維持されていた。

コメント：鶴田 格（近畿大学）

「自然社会としてのアフリカ農牧社会を理解するための理論的枠組み」

アフリカには、ほかの農業社会におけるような国家の支配下に編成された定着農耕に基づく農村共同体は、歴史的に形成されてこなかった。こうした農業社会以前の「自然社会」的性質を濃厚に保持しているアフリカ農村社会では、農牧という生業やそれに基づく社会がどのような現れ方をするのかを議論した。アフリカ農村では、小規模サブシステム社会が競合しているなかで、資本、交換財、富、政治的権力の源泉としての家畜とりわけウシを多数保有している牧畜民が農耕民より優位に立ってきた。しかし（とりわけ東アフリカにおいては）農耕と牧畜は二者択一の生業ではなく、環境に応じて随意の割合で結合される。こうした観点を強調してきたのが福井勝義氏によるタンザニアのイラク農牧民の研究である。本コメントでは、ほかの民族誌の事例や、ほかの研究者によるイラクの研究事例をひきながら、福井氏の農牧複合論を批判的に検討した。具体的には作物や家畜の生産面のみに注目するのではなく、家族の再生産や富の格差を考慮に入れる必要性を強調した。また厳しい乾燥という条件のなかで、農よりも牧に重きをおくという、土地に重きをおく農業社会とは異なる富や蓄積の概念が存在することなどを指摘した。

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.